

## 子どもを守るための「防犯ハウツー」言説の内容と論理

桜井 淳 平\*

### 1. 問題の所在と研究の目的

2000年代以降の日本社会は、学校内外における無差別・通り魔的な殺傷事件の続発を経験した。それに伴って子どもの犯罪被害が社会問題化し、子どもたちをいかに守るかへの関心が高まった。周知のとおり、その画期となったのは2001年6月に大阪教育大学附属池田小学校で発生したいわゆる「附属池田小事件」である。8人の児童が亡くなった惨劇は、日本社会に強く記憶されている。ただ、この事件によって問われたのは「学校の安全」という限定された範囲であり、それによって推し進められたのは学校の不審者侵入対策の範疇に収まるものでもあった。子どもの犯罪被害防止という問題圏の拡大に及ぼしたインパクトは限定的だったと見ることもできる。

そのような見方をすれば、「附属池田小事件」もさることながら、数年後の2004年11月（奈良県）、2005年11月（広島県）、2005年12月（栃木県）に相次いで発生した事件がもたらしたものは大きかったと言える。連続した3つの事件は、下校時に児童が連れ去られ、後に殺害されたという共通点があった。これによって登下校（通学路）の安全が問われたことは、子どもの犯罪被害防止への社会的関心を飛躍的に高めることとなった。それは「附属池田小事件」後を凌駕する勢いだったとも言えよう。

登下校（通学路）は、空間的にも時間的にもマージナル（境界的）な位置にある。学校と家庭の間に位置し、下校時は「寄り道」もあるため、子どもの行動を捕捉・管理しづらい。何よ

り、学校の場合は教師、家庭の場合は保護者というように、保護責任者を確定しづらいため、「誰が守るのか」が明確ではない。こうした特徴は登下校時の安全を守ることの難しさとして認識され、その難しさゆえ、「いかに守るか」「誰が守るか」という方法論をめぐる議論を惹起することとなったと思われる。試みに、子どもの犯罪被害防止に関わる新聞記事を収集・集計したところ<sup>(1)</sup>、「附属池田小事件」を含む2001年が19記事であったのに対し、2004年は41記事、2005年には141記事と飛躍的に増加していた。様々なメディアで関連する特集が組まれ、この時期、子どもを犯罪被害からいかに守るかをめぐる言説空間は急速に拡大した。

注目すべきは、こうしたなかで防犯・安全の「専門家」が重用され、専門的見地から子どもを守るための具体的・実践的な「ハウツー（How To）」——犯罪被害を防ぐための知識・構え・技法などの総体——が提示される機会が増したことである。そうした言説は子どもをもつ親（保護者）を主な宛先とし、新聞や雑誌にとどまらず、書籍の刊行にも結びついた。本稿ではそれらを「防犯ハウツー」と名づける。そのような言説が流布するようになったことは、何を意味しているだろうか。本稿が解き明かそうとするのはこの問いである。

親の視点に立つと、「防犯ハウツー」が子どもをもつ親にとって有益な情報として受容・支持されているために、流布したと考えることができる。先述したように登下校は役割・責任の所在が明確ではないため、数多くの親たちが、当事者意識をもって「何かしなければならない」と考えただろうと想像できる。「我が子が被害に遭うかもしれない」「でもどうすればよいかわか

\* 流通経済大学社会学部

らない」という大きな不安を抱いた親たちに対して具体的な処方箋を提示し、その不安を解消する一定の機能を果たしたと見ることができる。もしそうだとしたら、どのような言説が親の不安の解消に結びついたのであるか。

本稿では、「防犯ハウツー」言説の内容分析を行ない、提示されるハウツーとそれを意義づけるロジックを明らかにすることを目的とする。そして、「防犯ハウツー」が流布することの意味を、主に親の不安をいかに解消しうるかという観点で検討する。

## 2. 先行研究の検討

子どもの犯罪被害に関わる研究は、様々なメディアにおいて言説が飛躍的に増加した 2000 年代中頃から、それらと同様に数を増やした。「子どもが危ない」という強い課題意識に基づき、子どもを守るための方法を開発・検証および提言する実践性の高い研究が多くなっている。他方で、より俯瞰的な視座から、子どもの犯罪被害防止の諸実践・諸言説が広まる動向を捉え、その背景や意味を考察する研究は少ない。

子どもを守ろうとする背景に迫る際、まずはそこに犯罪不安の存在を見ることが可能だろう。しかし、犯罪不安のみに還元することには限界もあると思われる。なぜなら、2000 年代後半にはすでに犯罪不安は改善傾向にあったからである。日工組社会安全研究財団が継続して実施している「犯罪に対する不安感等に関する調査研究」を見てみよう。「あなたは、日頃、ご自身が犯罪の被害にあうのではないかという不安を感じることがありますか」という質問に対して「よくある」「たまにある」と回答した者の合計は、41.4% (2002 年) → 53.3% (04 年) → 44.9% (07 年) → 37.8% (10 年) → 37.8% (14 年) → 38.3% (18 年) と推移していた。また、「子どもが不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする不安」について「非常に不安」「かなり不安」と回答した者の合計は、21.6% (2004 年) → 26.1% (07 年) → 17.4% (10 年) → 18.0% (14 年) → 12.2% (18 年) と推移していた。ともに 2007 年

を頂点に改善傾向が見られるとともに、後者についてはそもそもさほど高くないと言えそうな結果であった。つまり、子どもの犯罪被害防止の拡大を読み解く際には、犯罪不安という独立変数に還元しない分析が必要なのである。

地域の見守り活動を対象とした研究では、犯罪不安とは別の視角で、その拡大が検討されてきた。広田 (2006) が指摘するように、登下校中の犯罪被害は減多に起きないため、自分たちのパトロール活動が役立っているのかよくわからない性質がある。では、彼らはなぜそれでも活動を続けるのか。芹沢 (2006) はそれを「快楽」から説明した。地域住民の連帯が希薄化し、コミュニティの活力が失われたと嘆く人々の感情に、そうした活動は一筋の光を灯してくれる。参加する人々に一体感を与え、古き良き時代のノスタルジーを呼び起こし、コミュニティ復活の感覚を生み出すのである。地域住民は、「大人が子どもたちに声をかけることで街が元気になった」と喜び、「生きがい」として活動を続けていくことになる。また大嶋 (2020) は、このことを防犯パトロール活動への参与観察を通して明らかにした。参加者は、過去の「地域」を取り戻すことが子どもの見守りにとって必要だと考え、それに基づいて声かけを継続していた。

他方、親の対策行動に焦点化した研究では、犯罪不安が分析の中心となってきた。荒井・藤・吉田 (2010) は、犯罪不安を自分や家族が被害に遭うかもしれない不安（個人的水準）と社会の治安に対して感じる信頼・安心感（社会的水準）に分けたうえで、防犯行動への関連を捉えた。そのほか、他者への一般的信頼という変数を加えて犯罪に対する認知的反応を調べた荒井 (2013)、就学前の子どもをもつ保護者の犯罪・事故不安の規定因を、教育・子育てに関する情報源の影響に着目して調べた河野 (2017) などがあるが、心理学分野を中心に、親の対策行動は概して認知的・感情的側面から捉えられてきている。

犯罪不安とは異なる視角から親の対策行動を捉える研究として、野尻 (2013) と齊藤・島田・原田 (2008) を挙げる。主に IC タグなどの「見

守り」技術を主題とした野尻（2013）は、そうした技術が導入・受容される背景にあるのは治安悪化不安ではなく、育児や家族をめぐる制度にあると述べ、監視社会論と個人化論を用いて検討した。後期近代において子どもへの配慮は家族の自己責任となり、「見守り意識」の先鋭化が生じる。一方で親（母親）のライフスタイルの多様化に伴い、実際には子どもを見続けられない状況も生じる。「見守り」技術は、そうした葛藤の解消策として要請されているという。また、齊藤・島田・原田（2008）は、社会的・文化的資源が不足する家庭で「被害防止情報」を入手しづらい可能性がある問題を検証した。その結果、家庭の文化的資源の多寡が保護者の情報入手を直接的に規定していること、社会的資源の多寡もその媒介効果をもつことが示された。ただ、野尻は「見守り」技術の使用、齊藤ら（2008）は情報入手行動に限った分析であり、より広範に、日常的な安全教育・安全管理の行動を捉えるものにはなっていない点で課題がある。

とはいえ野尻（2013）は、親の対策行動の背景に、育児の役割・責任が親（家庭）に集中する社会があることを示している点で<sup>(2)</sup>、本稿にとって重要である。親の対策行動を捉える際には、犯罪に対する認知・感情的反応に加え、社会に流布・定着する犯罪被害防止、さらには育児に関する知識・考え方も考慮に入れる必要があることが示唆される。「いかに防ぐか」「誰が担うか」をめぐる支配的な言説を親は受け取り、規範や役割を一定程度内面化するなかで具体的な行動に移している。こうした着想から、本稿は言説に焦点化した分析を行なう。

### 3. 分析対象と方法

本稿が分析対象とするのは、「防犯ハウツー」を伝える書籍（防犯ハウツー本）である。まず、分析結果を若干先取りしつつその特徴にふれ、意義を述べたい。「防犯ハウツー本」は2～4ページ程度で1つのトピック（具体的なハウツー）を取り上げる構成が一般的である。そのため、書籍全体としては多くのハウツーが網羅される。

しかもそれは箇条書きなどを用いた散発的な記述ではなく、ある方策がなぜ有効・必要であるかについて論説されている。また、子どもを守るという営みそのものの大切さや難しさにもふれられる。「防犯ハウツー」を特集する新聞・雑誌記事では十分な紙幅が費やされないこともあるので、こうした特徴は本稿の目的に沿っていると考えられる。

対象とする書籍の収集方法・選定基準について述べる。書名に「犯罪」の語が必ず含まれるとは限らないなど検索語が定まらないため、様々なワードを組み合わせで検索し、カバーする範囲をできる限り広げた。具体的には、CiNii Books（図書検索）を用いて「防犯」「犯罪」「安全」「危険」「被害」「守」の各語と「子」のAND検索を行なった。ヒットした書籍のなかから「防犯ハウツー」が主題となっている書籍を選定した。念のため、この時点で抽出された書籍の著者名で再検索し、漏れが無いかを確認した。

今回対象とするのは、a) 公共空間における、b) 子どもを対象とする、c) 犯罪被害の予防をテーマとし、d) 読者（担い手）は親をメインターゲットとしている、e) 一般書である。下記に挙げる書籍はこの条件に沿わないため除外した。

- a) ○学校内、家庭内（住居）、インターネット空間等における被害のみ扱うもの
- b) ○女性の被害が中心となるもの
- c) ○事故・災害・虐待・いじめなどの他の危険への記述割合が高いもの  
○性被害に限定されたもの（やや焦点化されすぎており、「防犯ハウツー」を網羅的に把握する趣旨とずれるため）  
○子どもを犯罪の加害者にしないこと（少年非行の防止）を中心とするもの  
○被害後のケアに特化するもの
- d) ○教師を中心とするもの
- e) ○専門書と判断されるもの  
○絵本

以上の条件に沿って 2020 年までの範囲で収集・選定した結果、分析対象とする「防犯ハウ

表1 分析対象とする「防犯ハウツー本」一覧（日本での発行年順）

- 1) 下山真二, 1997, 『子どものための護身術——自分の身は自分で守る』高橋書店.
- 2) 子どもの危険回避研究所編, 2001, 『子どもを犯罪・事故から守る安心マニュアル』学研.
- 3) 佐伯幸子, 2003, 『親子で覚える徹底安全ガイド』主婦の友社.
- 4) 毛利元貞, 2004, 『わが子を守る——通り魔・連れ去り犯・性犯罪者 etc. から』ぶんか社.
- 5) 高篠栄子・浅利真, 2004, 『被害者の親と呼ばれないために, 加害者の親と呼ばせないために——手遅れになる前にできること』金の星社.
- 6) 横矢真理, 2004, 『身近な危険から子どもを守る本——子どもの安全・安心ノート』大和書房.
- 7) 小宮信夫, 2005, 『親子で実践! 犯罪・危険・事故回避マニュアル——いざというときに子どもの生命を守る本』主婦と生活社.
- 8) 国崎信江, 2005, 『犯罪から子どもを守る 50 の方法』ブロンズ新社.
- 9) セーフティ教育研究会, 2005, 『子どもセーフティーマニュアルこんなとき, どうする?——犯罪被害防止・非行防止に』日本標準.
- 10) 横矢真理, 2005, 『犯罪の危険から子どもを守る!——子どもと親の不安を解消する 77 のヒント』学習研究社.
- 11) 著者不明, 2005, 『親子で学ぼう——子どもを危険から守る』ブティック社.
- 12) Mares, Benny, 2004, *Child Safety 101*, Unlimited Publishing LLC (=2006, 兵藤ゆき訳『子どもを守る 101 の方法』ビジネス社).
- 13) 柿沼信之, 2006, 『親子でまなぶ子どもの防犯ガイド——捜査のプロが教える!』角川学芸出版.
- 14) 清永賢二・宮田美恵子・村上信夫, 2006, 『子どもの安全はこうして守る!』グラフ社.
- 15) 国崎信江, 2006a, 『狙われない子どもにする! 親がすべきこと 39』扶桑社.
- 16) 国崎信江, 2006b, 『こどものあんぜんどくほん』太陽出版.
- 17) 国崎信江, 2006c, 『わが家のチャイルドセキュリティ——あらゆる危険から我が子を守る Q&A』一ツ橋書店.
- 18) 中島正純, 2006, 『元刑事が教える子どもの安全新常識!』ベストセラーズ.
- 19) 岡本依子・桐生正幸, 2006, 『幼い子どもを犯罪から守る!——命をつなぐ防犯教育』北大路書房.
- 20) 寺本潔, 2006, 『犯罪・事故から子どもを守る学区と学校の防犯アクション 41』黎明書房.
- 21) 内野真, 2006, 『子どもを犯罪から守る』明石書店.
- 22) 著者不明, 2006, 『犯罪から子どもを守る! ハンドブック』あおば出版.
- 23) ほんの木編, 2007, 『犯罪といじめから子どもを守る幼児期の生活習慣』ほんの木.
- 24) 石井栄子, 2007, 『親子できたえる防犯力——親子の会話が, 防犯の第一歩! 自分で考え, 自分で身を守る子どもを育てるために』フレーベル館.
- 25) 北芝健・テレンスリー, 2007, 『誰が子どもを狙うのか——実際の事件に学ぶ「使える」防犯 40 か条』東邦出版.
- 26) 小宮信夫, 2007, 『親子で学ぶ「子どもの防犯」ワークブック』東京書籍.
- 27) 近藤卓・ALSOK あんしん教室, 2007, 『お父さんは, 子どもを守れるか! ?』日本文教出版.
- 28) 佐伯幸子, 2007a, 『親子で学ぶ防犯の知恵——「安全作法」を身につけよう!』少年写真新聞社.
- 29) 佐伯幸子, 2007b, 『子どもを守る! ママとパパのファミリー安全ブック』メイツ出版.

- 30) 清永賢二, 2008, 『防犯先生の子ども安心マニュアル』 東洋経済新報社.
- 31) 武田信彦, 2011, 『親子で読もう! 子どもの安全ブック』 スタジオタッククリエイティブ.
- 32) セコム株式会社「子を持つ親の安全委員会」監修, 2012, 『防犯のプロが教える わが子を守る家族の安全マニュアル』 ケーズ・パブリッシング.
- 33) 北芝健, 2013, 『犯罪にねらわれる子どもたち——今すぐに実践できる子どもを犯罪から守る方法』 メディアパル.
- 34) 舟生岳夫, 2017, 『子どもの防犯マニュアル』 日経 BP 社.
- 35) 宮田美恵子, 2018, 『うちの子, 安全だいじょうぶ?——新しい防犯教育』 新読書社.

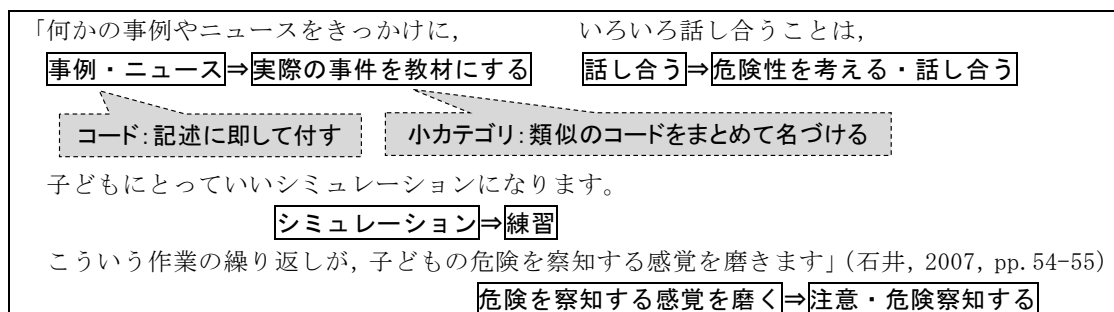


図1 記載されている方策の抽出・コード化・分類のプロセス(例)

「三本」は表1に示す35冊となった。

著者の肩書・専門<sup>(3)</sup>に目をとめておく。著者24名は、大学または民間の研究機関に所属する研究者(8名)と、「危機管理対策アドバイザー」「安全インストラクター」「危機管理コンサルタント」といった独自の肩書を用いて講演・執筆活動を主とする「非・研究者」(16名)に大別された。後者には、元警察官・警備業関係者(5名)や母親・女性であることにふれる者(3名)も含まれ、そうした経験に基づいた記述も見られる。また研究者か否かにかかわらず自身の専門分野を名乗ることがあり、それは教育学・社会学・心理学を軸に多岐にわたる。そのほか、組織・グループや出版社によって編纂されたものが4冊、著者不明が2冊含まれる。以上をふまえると、専門知と経験・日常知、換言すれば垂直的知識と水平的知識<sup>(4)</sup>、双方が混交する記述が生み出されていることがうかがえる。

ところで、言説の捉え方をめぐっては様々な立場があるが、本稿では「言説が一定の形式で分布していること、そして、言説の集積からとある言説空間が構成されていることそれ自体が経験的・社会的な事実である」(赤川, 2006, p. 37)

との立場に依拠する。すなわち、言説を実態の反映として捉えるなどと、言説と実態の関係を因果論的な二分法で捉えるのではなく、社会的事実としての言説の布置を観察・記述していく。それは、ある言説が存立することの説明変数として、「このような社会だから」という言説外ではなく、「言説内要因の重要性に賭けてみる立場」(前掲書, p. 41)である。本稿でもその立場から、あるハウツーがまとまって語られるのはなぜかを、言説内のロジックから説明づける。

#### 4. いかにして子どもを守るか —提示される「防犯ハウツー」の詳細—

本節では、「防犯ハウツー」言説においていかなる方策が提示されているかを詳細に描き出す。まずは方策を抽出し、分類・整理する手続きを図1に沿って述べる(以下、括弧内は一例)。まず、文章から方策と見なせる箇所を抜き出し(=何かの事例やニュースをきっかけに)、それに即したコードを付す(=事例・ニュース)作業を繰り返す。つぎに、KJ法を用いて類似のコードをまとめて「小カテゴリー」を作成し(=実際の

事件を教材にする),さらにそれを「中カテゴリ」から「大カテゴリ」へとまとめあげていった。最後に、カテゴリとして束ねられる過程で元の文章の趣旨と齟齬をきたしていないか、原文に立ち返って検証し、必要に応じて修正した。

この作業で得られたカテゴリを一覧で示したのが、表2である。提示される方策は、【①監視・管理】【②知識・ルールの伝達】【③自衛】【④アクティブな学び】【⑤子どもとの関わり方・構え】【⑥地域への主体的な関わり】の6つにまとめられ、すべての書籍がこれを緩やかに網羅している。以下では、「大カテゴリ」ごとに項を立てて論じていく。なお、ある方策がどちらのカテゴリに属するか非常に曖昧なケースも存在する。そのため、カテゴリは排他的ではなく重なり合っていることを付言しておく。

#### 4.1. ①監視・管理

まずは【①監視・管理】カテゴリとしてまとめ上げた方策を見ていく。1つ目に、地域における不審者の出没情報や対策の実施状況など、被害防止に資する情報を得ることが述べられており、これらを【情報収集】としてまとめた。2つ目に、「公共の場で服を着替える」「持ち物に名前を書く」などの危険を寄せつける行動や身なりを慎むことが述べられおり、これらを【危険を寄せつけない行動】としてまとめた。3つ目に、子どもをひとりにせず大人が目を見守らないこと、GPS 端末や送迎サービスなどによってそれを補完することが述べられており、これらを【見守り】としてまとめた。4つ目に、見守り・パトロール活動の推進や公園の環境整備、防犯灯の設置など、地域の防犯機能をハード/ソフト両面で高める方策にも言及されている。パトロール活動については、買い物や犬の散歩などの際の「ながら」活動といった軽微な見守りを増やすことが強調されている。これらを【地域レベルの見守り】としてまとめた。以上の方策は、子どもが危険に巻き込まれないよう監視・管理する方策と見ることができる。

#### 4.2. ②知識・ルールの伝達

つぎに【②知識・ルールの伝達】カテゴリを見ていく。1つ目に、どのような場所・人・車

が危険なのかをあらかじめ子どもに伝え、安全な道を使わせたり、危険な人に近づかせないようにしたりすることが述べられており、これを【安全/危険の知識】としてまとめた。2つ目に、「誰とどこに遊びに行き、何時に帰るか家に連絡する」などの決まり事・ルールを作ることが述べられており、これを【決まり事】としてまとめた。これらは、子どもが危険に近づかないように知識やルールを伝達する方策と見ることができる。

#### 4.3. ③自衛

以上の2つのカテゴリは、子どもの行動制限を伴いながら、大人が子どもを直接的に守ろうとする方策であると特徴づけられる。それとは対照的に、子どもが自分の安全を自分で守ろうとする側面にも多く言及されていた。それが【③自衛】カテゴリである。ここでは、子どもに危険が迫る局面が想定され、そのとき子ども自身がいかに対応すればよいかが述べられている。

1つ目に、「五感・直感を働かせる」「すぐ気づく」など危険への感性を高めることが述べられており、これを【注意・危険察知】としてまとめた。2つ目に、相手に声をかけられた場合に「無視する」「逃げる」などが述べられており、これを【退避・無関係】としてまとめた。3つ目に、相手に接近され、襲われた場合の対応として「適切な距離を保つ」「『やめて』と意思表示する」「大声を出す」「殴る・蹴る」などが述べられており、これを【抵抗・対処・救助】としてまとめた。4つ目に、【標語 (いかのおすし)】である。「いかのおすし」とは、「いかない」「のらない」「おおごえでさけぶ」「すぐにげる」「しらせる」の頭文字をとった有名な標語で、【注意・危険察知】【退避・無関係】【抵抗・対処・救助】の諸要素が含まれている。5つ目に、自分を守るためには性・身体に関する知識、特に「プライベートゾーン」について早くから教えておき、「不快」の感覚を養う必要があると述べられており、これを【性・身体教育】としてまとめた。6つ目に、「判断力」「コミュニケーション能力」など、警戒して身を守るために広範に役立つ能力が指摘されており、これを【総

表2 提示される「防犯ハウツー」（分類・整理の結果）

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ
①監視・管理	情報収集	不審者情報／その他の情報収集
	危険を寄せつけない行動	危険を誘発しない持ち物・身なり・行動／子どもの名前を晒さない
	見守り	ひとりで〇〇させない／目を離さない／警備・人材派遣／公的な預け先／私的な預け先／携帯電話・位置情報
	地域レベルの見守り	ハード面の整備／駆け込み場所の整備／きれいで見えやすい環境づくり／パトロール活動／“ながら”活動・負担の少ない活動／集団登下校
②知識・ルール の伝達	安全／危険の知識	危険な場所（近づかせない、伝える）／危険な人・車（近づかせない、伝える）／夜を避ける／安全な道・場所を使う
	決まり事	時間の決まり事／時間・場所を連絡する／その他の決まり事／決まり事の考え方を示す／標語をつくる
③自衛	注意・危険察知	予測する力・直感やカンを磨く／危険を察知する／注意・警戒する／歩き方／大人に相談・報告する
	退避・無関係	逃げる・立ち去る／物をもらわない／ついていかない／答えない・無視する
	抵抗・対処・救助	距離を保つ／攻撃する／大声を出す／機器の使用／「嫌だ・やめて」と言う／対話する／大人に助けを求める／通報・電話連絡
	標語（いかのおすし）	
	性・身体 の教育 総合的能力	
④アクティブな 学び	考える・話し合う	危険性を考える・話し合う／とりうる対策を考える・話し合う／実際の事件を教材にする／街・通学路を歩く／駆け込める安全な場所のチェック／地域安全マップ
	練習・体験	練習／講習会等／遊びを通して学ぶ／身体 の感覚をつかむ
⑤子どもとの 関わり方・構え	会話・親密性	コミュニケーションを密にする／愛・絆を深める／命の大切さを伝える
	基本的しつけ	常識・礼儀／生活習慣の健全化
	子ども目線・ 子ども理解	子どもの気持ちに注意を払う／子どもの話を聴く／配慮する・尊重する・承認する・安心感を与える／対等な関係／子ども目線／子どものことを知る／子ども一人ひとりに合わせる／子どもの成長発達に則す
	意識のもちよう	手本になる／楽観／悲観的に考える／本気・覚悟・勇気をもつ／努力・意識高く／スピード／基本を押さえる／常識を捨てる
⑥地域への 主体的な関わり	付き合い・あいさつ	近所づきあい・交流／子の友達やその親との交流／あいさつ
	地域への 参画と働きかけ	地域活動への能動的な働きかけ／自治体への能動的働きかけ／連携協力・ネットワークづくり／イベントや活動への参加

合的能力】としてまとめた。

特筆すべきは、「引き返さない」「逃げない」などと子どもに伝えるにとどまらず、つぎに挙げるように、それができる子どもに「育てる」ことが意識的に語られている点である<sup>(5)</sup>。

『いやだ』と言える子ども。『危ない』と思ったら、さっさと引き返すことのできる子ども。そんな子どもに育ててほしいのです」(清永, 2008, p. 30)

#### 4.4. ④アクティブな学び

では、そのような子どもの自衛能力を育てるために何をすべきか。そこで繰り返し語られている方策が特徴的である。

「危険な状況に的確に対処できる子どもに育てるためには、親が注意を促すだけでなく、子どもといっしょに街を歩き、さまざまな状況を考えさせ、危険性に気づかせることが必要です」(小宮, 2005, p. 3)

「[事件の] 報道は、親だけでなく子どもと一緒に防犯について考える大切な機会です。たとえ恐ろしい事件であっても、きちんと事実を伝え、どうしたらこのような危険を回避できるか、対策を考えましょう。その際、親から一方的に教訓を押し付けるのではなく、子どもにも問題解決の方法を考えさせることで、生きた知識を身につけさせることができます」(国崎, 2006a, p. 12)

まず、ここで挙げた「注意を促すだけでなく」「一方的に教訓を押し付けるのではなく」という記述からは、監視・管理ないしは知識・ルールの伝達だけでは不足だという見解が読みとれる。それは、「危険だから近づかないで」と注意することは、それ以外の場所を安全と過信する思考停止を招くからである。また、「教訓」とは具体的な生活・行動圏に即さない脱文脈的なものだからである。

対照的に称揚されているのは、子どもと一緒に「考える・話し合う」ことであり、全ての書

籍で繰り返し強調されている。具体的には、先の引用で「街を歩き、さまざまな状況を考えさせ」「恐ろしい事件であっても、きちんと事実を伝え、……対策を考えましょう」とあるように、街・通学路を歩きながら安全／危険な箇所や準備の仕方を考えていくこと、また事件報道を教材にして考えることが述べられている。地域や事件というリアルに沿って「考える」ことが「生きた知識」の獲得につながるとされている。これらの記述を【考える・話し合う】としてまとめた。

つづいて、これに比肩して繰り返し言及されているのが、「練習する・体験する」ことの重要性である。身を守る技能は「いざという時に実践できなければ意味が[ない]」(清永, 2008, p. 144) ため、知識として伝えるだけでなく、「日頃からの継続的な練習」や、「シミュレーション」「ロールプレイング」などの体験的活動によって身体化する必要があると述べられている。声をかけられたときに無言で立ち去る、大声を出す、腕をつかまれたときに振り解くなど、様々なシチュエーションに沿った練習が挙げられている。

「親が実際に車を使って、車から『どこに行くの、乗せていってあげようか』『駅はどこか教えて』などと声をかける練習をすると……万が一、そうした状況に遭ったときでも、『あ、これはパパと練習したことだ』と思いだして……安全になるための行動がすぐにとれるようになるでしょう」(佐伯, 2007a, p. 156)

ここで称揚された「考える・話し合う」および「練習する・体験する」は、近年の学校教育において価値づけられている「主体的・対話的で深い学び」ないしは「アクティブ・ラーニング」の方法論と重なるところがある。平成 29・30・31 年改訂学習指導要領では、教職員と子ども、子ども同士が対話することで思考を深めていくような対話的学習、そして体験活動の充実が盛り込まれた(中央教育審議会, 2016)。詳細には踏み込まないが、そうした方法論との重なる



りをふまえ、これらを【④アクティブな学び】と名づけた。

#### 4.5. ⑤子どもとの関わり方・構え

そして「防犯ハウツー」言説では、その学びの基盤となる子どもとの関わり方や構えを強調するところにまで踏み込んでいる。【⑤子どもとの関わり方・構え】カテゴリからそれを詳細に描き出す。

1つ目に、【会話・親密性】である。ここでは、〈アクティブな学び〉が家庭における日常的なコミュニケーションのなかでこそ行なわれることが示される。考えること・練習することは犯罪被害防止を特別に意識した場面でなくても、日常のコミュニケーションのなかで自然に行なわれるのだという。つぎに挙げる記述でも、自分で考えて答えを導く機会が日常的にある子どもは、自分で状況判断できる子どもに育っていくと述べられている。

「もっとも安全だと思われる行動を取れる子に育てる、ということです。そのような子に育てるためには、且ごろからの、家庭でのコミュニケーションが重要になります。親が子どもに一方的に答えを示すのではなく、こんなときあなたならどうする？どうしたらいいと思う？と呼びかけ、子どもが自分で考えて答える、このようなコミュニケーションが日常化している子どもは、自分で判断し行動できる子に育つでしょう」（石井、2007, p.3）

加えて、家庭での日々のコミュニケーションには、愛情や信頼を伝え、「自分自身が大切な存在と思われている」との感覚を抱かせる意味もあることが強調される。つぎに挙げる記述に見られるように、そういった愛情や信頼で結ばれる関係なしには、安全のメッセージは「浸み込んでいかない」のである。

「愛情の交換そして人を信頼すること。今の『安全学習』には、関係のないように思えます。しかしこうした基本的な人間関係の成立なしには、安全に関してどんなにいいことを

言われても、子どもの体の中にその言葉は浸みこんでいかないのです」（清永・宮田・村上、2006, pp.149-150）

さらに、被害に遭った後を想定した場合も、日常的なコミュニケーションが重要になると述べられる。自分の安全を自分で守ることを前提とするため、現実には危険に遭遇し、軽微な被害に遭うことも想定される。会話を重ねて「何でも打ち明けられる信頼関係」を構築することで、早い段階で子どもの異変を察知し、深刻な被害に至る前に食い止めることができると論じられている。

「すべてを打ち明けてくれる信頼関係をふだんからつくっておかなくてはなりません。…〔被害に遭った後に〕出来事について問いつめても、子どもは何も答えられません。……会話をたっぷりして、子ども自身が、話すことで伝わったと思える経験を一つでも多く積み重ねておくのです」（岡本・桐生、2006, p.70）

2つ目に、【基本的しつけ】である。自分で自分を守るためには、「礼儀」「公共のマナー」を遵守する意識を高めたり、「規則正しい食事・睡眠」など生活習慣を健全にすることが必要であると述べられている。

『判断力』がうまく働けば、被害を最小限にすることができるんだ。とっさの場面でいい考えを思いつくには、体やところが疲れていてはダメ。……体やところの元気のもとは、快食・快眠・快便」（横矢、2004, p.89）

3つ目に、子どもの性格や運動能力、行動範囲などを理解する、子どもを安心させる、子どもに自信をもたせる、子ども目線で考えるなど、子ども中心に対策を練る必要性が示されており、これらを【子ども目線・子ども理解】としてまとめた。

4つ目に、「[自衛能力は] 親が丁寧に教えて

あげることではじめて身につく」(佐伯, 2007a, p. 87) などと, 子どもが被害に遭うか否かは親の働きかけ次第であると喝破する記述が見られた。「子どもの手本になるように」「ポジティブな姿勢を持って」「本気になって」などと, 具体的な意識のもちようが示されている。これらを【意識のもちよう】としてまとめた。

以上では, 〈アクティブな学び〉を成立させる基盤としての家庭の役割が強調され, 日々の育児・教育と接合させた言説が見られた。

#### 4. 6. ⑥地域への主体的な関わり

最後に, 【⑥地域への主体的な関わり】カテゴリについて見ていく。「防犯ハウツー」言説で示される方策は, 親と子どもの関係だけで完結しておらず, 親子で地域と関わるのが重要だと述べられていた。具体的には, 「近所づきあい」を活発にして我が子を近隣住民に紹介したり, 積極的に交流したり, 感謝を述べたりすることが必要だとされる。それは, 子どもに対する関心の目を増やし, 「見守ってもらう」ためである。そのため, 子ども自身が「あいさつ」することの重要性も繰り返し語られていた。これらを【付き合い・あいさつ】としてまとめた。

「休日にでも通学路を親子で一緒に歩いてみて, 途中の民家から出てきた方などにごあいさつしておきましょう。いつもこの通学路を利用していることをお話しておけば, 普段から見守ってくださる方もいると思います。こういった『ごあいさつ』をしておくことで子どもたちの顔も覚えていただき, 親身になって見守ってもらえるし, 子どもたちも地域の人たちと知り合うことができ, いざという時に助けを求めやすくなるでしょう。子どもたちにも, 普段から地域の方々と顔を合わせた時には, しっかりあいさつをするように指導しておいてください」(横矢, 2005, p. 88)

また, 地域の防犯対策へ要望を出したり, 地域ネットワークを組織していくなど, よりアクティブな行動も期待されている。また, 子どもとともに地域のイベントに参加することも大事

だとされる。これらを【地域への参画と働きかけ】としてまとめた。

ここには, 地域の見守りは無条件に得られるものではなく, 親と子どもの主体的なアクションによって引き出されるという考え方が表れている。

### 5. 〈アクティブな学び〉が意義づけられるロジック

#### 5. 1. 「防犯ハウツー」言説が前提とする犯罪観

前節では, 「防犯ハウツー」言説で提示される方策の全体像を描出した。改めて総括すると, 2つの特徴を析出できよう。第一に, 監視・管理や知識・ルールの伝達を伴って「大人が子どもを守る」という方向性よりも, 「子ども自身で守る」という方向性が重視されている。第二に, 子どもを安全の主体へと育てるために〈アクティブな学び〉が重視されている。それは一見, 犯罪被害防止から程遠いように思える, 家庭における日常的な関わりに基づいている。本節では言説をさらに仔細に検討し, 特に〈アクティブな学び〉とその基盤となる子どもとの関わり方が, いかなる言説の下に意義づけられているかを検討したい。

まず, 「防犯ハウツー」言説が前提とする犯罪観の視点から論じる。言説では, 加害者(不審者)の見た目, 下見の時期や回数, 声のかけ方, 諦めるタイミングなどの犯行手順・心理状態が, 犯罪機会論の理論に依拠しつつ, 「元犯罪者からの聞き取り」なども参照しながら説明されている。それによると, 今日の子どもの標的とする犯罪は常識的・古典的な犯罪観で捉えることができないという。〈アクティブな学び〉の有効性は, そうした犯罪の特徴から論拠づけられている。

まず, 今日の不審者の見た目は, 「サングラスをかけた怖い目つきの男性」などの典型的イメージでは捉えられないと棄却される。では何を基準に安全／危険な人を判断すればよいか。かわりに示されるのは「その場にそぐわない人」「大丈夫と感じた人」といった曖昧かつ主観的

基準である。これは大人が教示するより、子どもがその場で考え、判断せざるをえないものである。不審者がわかりにくいとすると、「本当に必要な情報を持っているのは親でも専門家でもなく、その場にいる子ども」(毛利, 2004, p. 120)という記述に象徴されるように、現場での即興的な判断に期待するしかない。

また、加害者の犯行は突発的・衝動的なものとは描かれず、標的が誰でもよい無差別的な犯行としても描かれない。狙いやすい子どもを慎重に値踏みし、成功可能性が低ければ諦める理性的・合理的側面が一貫して強調されている。すなわち裏を返せば、子どもが適切な態度や行動で対応すれば、相手も諦め、深刻な被害を招くことはないとされ、被害に遭う原因・誘因の一端は子どもにあるという犯罪観を看取できる。

「何かあれば、迷わずに叫ぶことができる、逃げるができる子どもは狙われにくいものです。こうした考え方をもち、適切な自己表現を行える習慣のついた子どもは自信にあふれています。そのため、狙われにくい雰囲気  
を自ずと周囲に与えるのです。子どもを狙う相手は、犯行が周囲に知れることを恐れるため、おとなしい子どもを狙う傾向が強くなります」(毛利, 2004, pp. 48-49)

引用した記述では、「適切な自己表現を行える」「自信にあふれている」子どもは狙われにくく、加害者は「おとなしい」子を狙うと述べられている。これをふまえると〈アクティブな学び〉は、標的になりやすい「子どもの弱さ」に対処する方策であると言えよう。「弱さ」とは、心構えや当事者意識、自信が備わっていないという心の水準のものであり、「考える」「練習する」ことを重視する方策は、この意識化に関わっている。

「とるべき手段を考える癖をつけさせることで、いざというときに『正しい判断』にもとづいて『素早く行動』できるようにするのです。『いざとなったらなんとかなる』『自分に

は起こらない』そんな風に考えていたら、命だって落としかねません。事件は自分の身にも起こり得る——このことを忘れてはいけません」(国崎, 2005, p. 14-15)

「何回も体を動かして練習しましょう。……大切なのは、『本気』と『勇気』という心構えを同時に体得することです」(清永・宮田・村上, 2006, pp. 154-155)

このように、心の面での弱さは〈アクティブな学び〉によって対処可能だが、では、身体的な弱さ——明らかに大人に劣ること——はいかに論じられているだろうか。この点については仕方がないこととされ、むしろ「いかに無力であるかを、子どもたちに実感させ」(石井, 2007, pp. 48-49), 大人との非対称性を体得させることが危機意識を育てると述べられている。

「体をガシッとつかまれた状態から暴れて逃げ出す練習もしておきましょう。……いかに身動きがとれなくなるかを体験するだけでも、『恐いな』『知らない人には近づかないでこう』という子どもの危機意識を育てることになります」(中島, 2006, p. 35)

典型的なイメージで判断できない加害者がしたたかに「弱い子ども」を標的にするという今日的犯罪観から、〈アクティブな学び〉は意義づけられる。標的となる子どもの「弱さ」は身体と心に分節化できるが、前者を引き受け、後者を高めることで、子どもの対応力を引き出そうとしている。

## 5.2. 犯罪被害防止のディレンマの解消

つづいて、犯罪被害防止のディレンマの解消という視点から論じる。「防犯ハウツー」言説では、犯罪被害防止が矛盾をはらむ難しい営みであることにふれられる。

『自分を守ってくれるのも大人』、そして同時に『自分に危害を加える可能性のある大人もいる』という、一見相反する2つの大人像をもつことやそれを理解させることは極めて

困難です。……目新しいさまざまなことに興味・関心をもつことを願い、そのような環境をできるだけ多く用意したいと考える教育の立場からみると、それを阻害することになりかねない防犯について教えないといけないことは、大きな矛盾をはらむことになります。実は防犯教育の最も難しいことは、この両義性なのではないかと思います」(岡本・桐生, 2006, p. 7)

ここでは、犯罪被害防止について教えることは「自分を守る大人もいる／危害を加える大人もいる」という矛盾を教えることになり、子どもの教育を阻害することにつながりかねないという視点が示されている。こうした記述からは、子どもの犯罪被害への不安が単純な「犯罪不安」ではないことが読み取れる。すなわち、対策の強化が目下の安全につながる反面、長い目で見たときに子どもの成長発達に悪影響を及ぼすのではないかという矛盾ないしはディレンマに伴う不安を含むものである。

そこで「防犯ハウツー」言説には、このディレンマを解消するロジックが用意されている。それが、日常の子どもとの関わりにフォーカスする語り口である。言説では、自衛する力が遊び、あいさつ、親との会話などといった子どもの普段の生活のなかで高めることができることや、〈アクティブな学び〉をそこで自然に経験するからこそ、子どもたちはすでにそれらの能力を自然に培っていることが論じられている。

「今はゲーム機などで遊ぶ子が多く、公園でもゲーム遊びに夢中になっている子どもたちの姿を見かけます。ただ、鬼ごっこやかくれんぼ、リレーなど『走る』『叫ぶ』という動作が必要な昔ながらの遊びも楽しんでほしいと思います。それは、走って逃げたり、大声で助けを求めるための基礎訓練にもなるからです」(宮田, 2018, p. 81)

「武道など特別な技術を身につけなくても、気づく、驚く、避ける、逃げるなど、子どもたちにはすでに持っている能力がたくさんあ

ります。どれも、日々の生活の中ですっかり身につけているものばかりです」(武田, 2011, p. 112)

「防犯教育は、特別な教育というより子育てや教育の根本に通じる」(岡本・桐生, 2006, pp. 61-62) という表現に象徴されるように、犯罪被害防止の営みを育児・教育の営みに重ね合わせる語り口が特徴的に見られた。特別な能力を授けたり、特殊な対策を強化したりする必要はなく、日常の育児・教育が十分にそれを包含するのだとしたら、子どもの教育への悪影響も回避しうる。犯罪被害防止に不可避免的に生じするディレンマはこのように解消されていると考えられる。

## 6. まとめと考察

本稿では、子どもの犯罪被害が社会問題化するなかで「防犯ハウツー」が提示される機会が増したことに注目し、その言説の内容分析を行った。最後に、得られた知見をまとめたうえで、そうした言説が流布する意味について考察を加える。

まず、「防犯ハウツー」言説で提示される方策を抽出し、分類・整理したところ、【①監視・管理】【②知識・ルールの伝達】【③自衛】【④アクティブな学び】【⑤子どもとの関わり方・構え】【⑥地域への主体的な関わり】の6カテゴリにまとめられた。他方で、ICタグや携帯電話など、「見守り」技術の活用への言及は少数にとどまった。

「防犯ハウツー」言説において、子どもの自衛能力を高めるための〈アクティブな学び〉と、その基盤となる子どもとの関わりが繰り返し語られていることがわかったので、つづいて、その言説を意義づけるロジックを検討した。1 点目に、子どもを標的とする今日的な犯罪に対応するというロジックである。一見犯罪者だとわからず、狙いやすい「弱い」子どもを探す犯罪者像は、子ども自身が「狙われにくい」存在になること、その場で即興的な判断をとることの

重要性を際立たせる。その際、〈アクティブな学び〉は子どもの心の弱さに対処する策として意義づけられていた。2 点目に、犯罪被害防止のディレンマを解消するロジックである。「防犯ハウツー」言説では、対策を強化することが子どもの教育に悪影響を及ぼすディレンマへの言及が見られた。そこで、そうしたディレンマを解消するために、犯罪被害防止の営みを育児・教育の営みに重ね合わせるという戦略が採られていた。

「防犯ハウツー」言説が流布しているという社会的事実、それが一定の支持を得ていることを意味する。本稿の冒頭で、それは親の不安の解消につながるものであった可能性を仮説として示した。この点を中心に考察を加えたい。

まず、犯罪被害という予測不能の出来事に対するコントロール可能性を高めるという点で、親の不安の解消に結びつくと思われる。犯罪被害が「誰にでも起こりうる不運」ではなく、「狙われやすい」子どもがいて、犯罪に強い子どもに育てることで被害の確率を減らせるという考え方に立つことで、コントロールできるものへと変換している。また、犯罪被害防止を特殊な営みから日常的な育児・教育の営みへと位置づけなおすことは、日常的に質の高い育児・教育を遂行できている家庭にとって、「うちは大丈夫」という自信をもたらすものとなるだろう。

このように考えると、「見守り」技術への言及が少なかったことも合点がいく。犯罪被害それ自体を「見守り」技術で予測できるわけではないからである。今日の犯罪の予測しがたさに対しては、むしろ普段の育児・教育という範疇だけがコントロール可能であり、「それさえきちんとしていれば大丈夫」というメッセージこそが安心感をもたらすのだと思われる。

そうしたメッセージは、「防犯ハウツー本」の読者層と親和的ではないかと思われる。被害防止情報の入手が家庭の社会階層と大きく関わっているという齊藤ら（2008）の知見とあわせれば、「防犯ハウツー」言説に積極的にアクセスしているのはミドルクラス以上の家庭であろう。「防犯ハウツー」言説は、そういった質の高い

育児・教育を意識的に実践している層に支持される内容を備えていると言えそうである。

他方で、親の新たな不安を帰結する可能性も指摘しておかねばならない。薬物事犯者の社会復帰を促す施設プログラムを対象とした平井（2015）は、薬物使用に至る「引き金」「危険サイン」の除去につながるよう日々のライフスタイル全体を健全に組織化する要求が、プログラム受講者に課される点に着目した。平井はこういった受講者への「主体化」要求に功罪両面があることを指摘している。自己コントロールによって薬物使用から逃れられるという知は受講生にとって無力さから脱する「福音」になっていた一方、ライフスタイル全体を健全に見直すべきとの要求は受講者に困難をもたらしした。この指摘は、「防犯ハウツー」言説にも敷衍しうる。日々の生活全体を健全・教育的に組織すべきとの要求は、先述した通り、予期できない犯罪被害へのコントロール可能性を高めるが、責任の範囲が生活全体に広がる新たな不安をも呼び込むものである。

「家庭で『勉強したら、ゲームを買ってあげる』など、子どもが何かをすることによって代償としてものを与えているような場合、ものに釣られるという危険性が高いかもしれません。日ごろの子どもとのかかわり方も省みるようにしましょう」（佐伯，2007a, p. 102）

「日ごろの子どもとのかかわり方も省みるようにしましょう」と結ばれているように、家庭の生活・教育全体の省察・健全化が要求されている<sup>(6)</sup>。「勉強したらゲームを買ってあげる」という犯罪被害とは一見無関係に見える育児・教育方針にも言及されることは、親の役割・責任を肥大化させ、不安を醸成するベクトルも含んでいると思われる。「防犯ハウツー」言説は、親の安心を生みつつ、新たな不安の源泉にもなる両義性を有していると言えよう。

さて、「防犯ハウツー」言説が流布する意味を読み解く際、読者としての親にのみ焦点化するのは、やや視野が狭い。それとは別の視点で捉

えるならば、この社会の親に対する役割期待が投影された言説と見ることもできるだろう。それは、必ずしも犯罪被害防止の役割を親に限定・集中させるものではなかった。むしろ、「地域で子どもを守る」という姿を理想としつつ、そのような地域の防犯機能を高める(取り戻す)ことを家庭に要求するものであった。具体的には、地域住民に対して子どもを紹介したり、あいさつをする子に育てたりするなど、「子どもを守ってもらう」関係を地域と結び結ぶことを親に期待していた。また、街歩きをしたり、公園で遊んだりするなど、地域との関わりを通して自衛能力を高めることを促していた。このように、親に対する役割期待は、単純に我が子を守ることにとどまらない広がりをもっていたと言える。以上の点において「防犯ハウツー」言説は、子どもをいかに・誰が守るべきかをめぐる社会の支配的な考え方を表象する言説となっていたことが示唆される。

本稿で描出してきた「防犯ハウツー」言説は、実際、親によっていかに受け取られ、実践されているのだろうか。あまり言及されなかった「見守り」技術も現実には多くの親に活用されていると推測すると、流布する言説を多くの親が実践しているという単純な関係ではないように思われる。そこには家庭の社会階層も大きく関わるかもしれない。本稿は書籍の分析にとどまったため、より視野を広げ、子どもの犯罪被害防止の言説と実践が織りなす社会構造を捉えることが、今後の課題となってくるだろう。

#### 【注記】

- (1) 読売新聞と朝日新聞を対象とした。データベースを用いて「防犯」および「犯罪&守」で検索し、ヒットした記事を確認して、子どもの犯罪被害防止がテーマだと判断される記事を抽出した。
- (2) 東・高木も同様の視点で、『「子どもの安全を守れるか」ではなく「誰が子育てをするのか」』というのがこの問題の本質(東・高木、2006、p. 137)と指摘している。
- (3) 著者紹介欄を参照し、複数の書籍がある場

合は特に最新のものを重視した。

- (4) 天童(2013)は育児雑誌の知識伝達構造を分析する際、医者や学者といった専門家が権威的・学術的知識を平易な表現で母親たちに伝える垂直的知識伝達と、読者参加型で育児のコツや失敗談などが共有される「共感」型の水平的知識伝達に区分し、1970年代以降、前者から後者へと変容したことを論じた。
- (5) 記述を引用する場合、適宜[ ]を用いて注釈を施す。また、文意が改変されない程度に「……」で省略を加えることがある。
- (6) 小宮(2005)には、被害の遭いやすさを点数で診断する「犯罪危険度チェック」が載っており、そこにも家庭の生活習慣が多く挙げられている。

#### 【文献】

- 赤川学、2006、『構築主義を再構築する』勁草書房。
- 荒井崇史、2013、「犯罪不安と一般的信頼との関連——犯罪被害に対する楽観視との比較を通して」『犯罪心理学研究』50(1)、pp. 15-25。
- 荒井崇史・藤桂・吉田富二雄、2010、「犯罪情報幼児を持つ母親の犯罪不安に及ぼす影響」『心理学研究』81(4)、pp. 397-405。
- 東浩紀・高木浩光、2006、「親と社会の『見守り』欲望が蔓延している」『論座』135、pp. 134-141。
- 中央教育審議会、2016、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』
- 平井秀幸、2015、『刑務所処遇の社会学——認知行動療法・新自由主義的規律・統治性』世織書房。
- 広田照幸、2006、『安全対策』は私たちに安全をもたらすか——子どもの登下校時の安全対策をめぐって『世界』754、pp. 70-78。
- 河野志穂、2017、「就学前の子どもを持つ保護者の犯罪・事故不安の規定要因——『学校安全』が唱える地域社会との協力関係の有効性」『淑徳大学短期大学部研究紀要』57、pp. 89-108。

野尻洋平, 2013, 「後期近代における監視社会と個人化——子どもの『見守り』技術の導入・受容に着目して——」『現代社会理論研究』7, pp. 67-79.

大嶋尚史, 2020, 「地域に子どもがいることの意味——子どもを見守る防犯パトロール」元森絵里子・南出和余・高橋靖幸編『子どもへの視角——新しい子ども社会研究』新曜社.

齊藤和範・島田貴仁・原田豊, 2008, 「ソーシャル・サポートと保護者による子どもの被害防止情報入手——社会的・文化的資源の検討」『犯罪社会学研究』33, pp. 178-197.

芹沢一也, 2006, 「地域防犯活動の行き着く先」浜井浩一・芹沢一也『犯罪不安社会——誰もが「不審者」?』光文社.

天童睦子, 2013, 「育児戦略と見えない統制——育児メディアの変遷から」『家族社会学研究』25(1), pp. 21-29.

※分析対象とした書籍は表1に掲載。ここでは割愛する。

## The “How-to” Discourse on Crime Prevention to Protect Children

Jumpei SAKURAI

Since the 2000s, crime victimization of children has become a social problem. Not surprisingly, interest in protecting children has increased. This study focuses on the “how-to” discourse on crime prevention, which is the practical discussion regarding how to protect children. The purpose of this study was to clarify the measures that are proposed in the “how-to” discourse and the logic behind them. Accordingly, 35 books were analyzed.

The results of the analysis follow.

The measures proposed in the aforementioned discourse were classified and organized into six categories: a) monitoring and controlling children, b) imparting knowledge and rules to children, c) teaching children self-defense measures, d) promoting active learning, e) interacting daily with children, and f) remaining proactively involved in the community. It was repeatedly mentioned that children should be raised so that they can protect themselves. To develop children’s ability to defend themselves, active learning, such as thinking and experiencing, was emphasized. The role of the family was also underscored as the foundation for this process.

The significance of developing children into safety agents through active learning was explained according to the following. First, the significance of preventing today’s crimes was presented. Today’s perpetrators carefully identify vulnerable children who are easy targets. Therefore, children must become unlikely targets. Second, the significance of resolving the dilemma which enhanced safety measures have a negative impact on children was indicated.

The discourse about developing children into safety agents through active learning is linked to relieving parental anxiety. This strategy increases the sense of control over the unpredictable events of criminal victimization, and it gives parents who provide quality parenting and education confidence.